

和歌山県立博物館研究紀要第二十八号 抜刷
二〇二二年三月三十一日 発行

《資料紹介》

和歌山県立博物館所蔵乾武俊収集資料について

―仮面（補遺）・神像・歴史資料―

大河内 智之

和歌山県立博物館所蔵乾武俊収集資料について ― 仮面（補遺）・神像・歴史資料 ―

大河内 智 之

はじめに

乾武俊（一九二一～二〇一七）は、和歌山市出身の詩人、教育者、被差別地域の民俗文化研究者で、仮面収集家でもあり、最晩年まで精力的に思索と著述に取り組んだ^①。その多数の収集仮面について、平成二十四年（二〇一二）に和歌山県立博物館への寄贈の意向が示され、それを受けて和歌山県立博物館では平成二五年一月七日から平成二六年一月二九日の会期で、企画展「仮面の諸相―乾武俊氏の収集資料から―」を開催して展示公開した。その際に作成した図録に掲載した資料のうち^②、現代作の二面（弱法師（二二〇）、黒い翁（二二二））は乾氏の意向により除き、別の二面を追加した二三面については、寄贈に先立ち「乾武俊氏の収集仮面について―中世在銘資料の紹介とともに―」（以下前稿と表記する）と題して紹介した^③。

その後、仮面以外の収集資料についても調査と整理を進め、平成二七年（二〇一五）二月に仮面二三七面（新たに把握した四面を追加）、諸外国の神像四五点、歴史資料三五件（一五二点）について寄贈を受け入れた（館蔵品番号一〇二四「乾武俊収集資料（仮面・神像・歴史資料）」）。

平成二九年（二〇一七）一月に乾氏が逝去され、遺品整理が行われる中で、さらに仮面一二面、神像三点が住居内から見いだされた。これらもコレクションと

して一括されることが望ましいとの遺族の判断により、令和元年（二〇一九）九月、追加寄贈された（館蔵品番号一一〇四「乾武俊収集資料 補遺分（仮面・神像）」）。資料の総数は仮面二三九面、神像四八点、歴史資料三五件（一五二点）を数えることとなった。

本稿では、前稿で未紹介の仮面と神像、歴史資料について基本情報と一部図版を示して、情報の共有化を図ることとしたい。

一 仮面―永禄一〇年銘笑う姥面の紹介とともに―

乾武俊収集資料中には貴重な在銘の中世仮面が五面含まれている。前稿では明応六年（一四九七）銘鬼神（墨書中に日向国真幸院馬関田庄〔宮崎県えびの市〕の地名あり）、享禄三年（一五三九）銘若い女（鹿児島県曾於市日光神社旧蔵）、天正四年（一五七六）銘水王・火王（佐賀県小城市牛尾神社旧蔵）を紹介したが、ここではもう一面を取り上げたい。

面長一九・二cm、面幅一四・一cm、面奥八・七cmを計る笑う姥（図1）で、眼窩が落ち窪んで眼球の膨らみを表し、二重の目尻は長く切れ上がって見開きも大きい。瞳は四角に切る。頬骨が出て口周りが痩せこけ、口角を上げ開口して笑い、上歯を出して歯は黒く染める。顎先にくっきりと刻んだ皺は肌のたるみの表現で

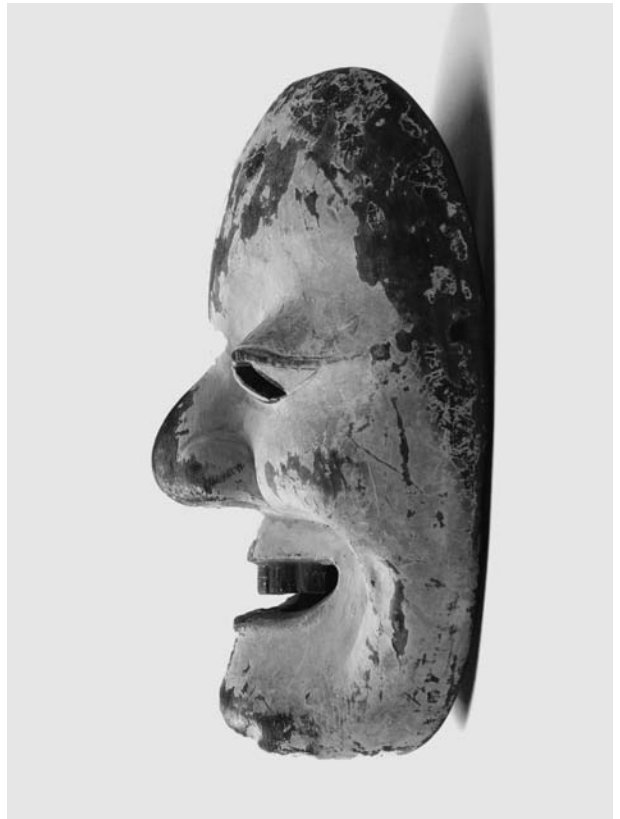
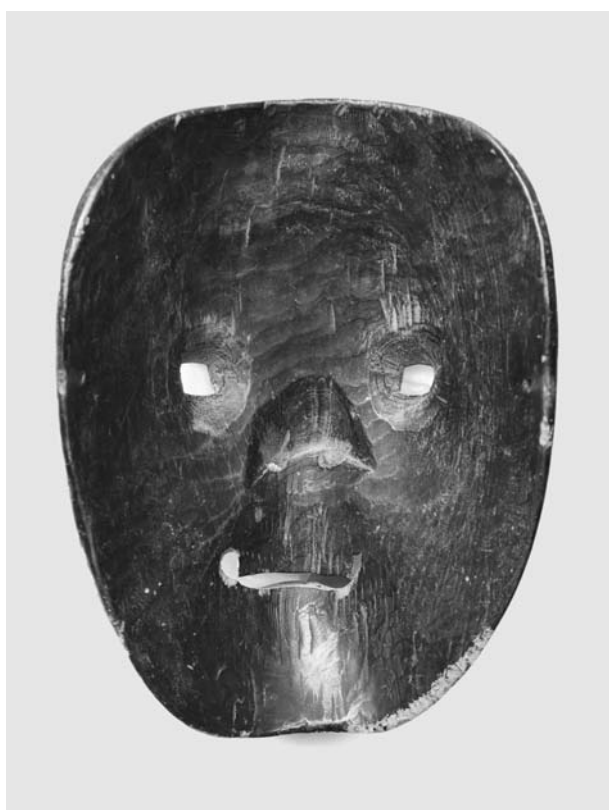


图 1 - 1 笑う姥



(赤外線撮影画像)



(赤外線撮影画像)



(赤外線撮影画像)

図 1 - 2 面裏

あろうか。

胡粉下地を施して白色に塗り、目の周辺には薄く朱を差し、唇は赤く塗る。毛描は中央に分け目を表さず、額中央にも髪束があり、髪際には細かく乱れる毛先を描いて、額には丸眉をあらわす。素地の層が経年の使用による古色を呈していることから、現状の彩色は後世の補彩とわかる。この後補彩色は全体を女面風に塗り上げるが、ただし造形のみからはにわかに性別を決めたいところがある。本面を入手した乾がこれを「男色」の面と表現したのは、その表情の捉えどころのなさに由来しよう。⁽⁴⁾ それでも、痩せた風貌の中にも輪郭の丸い形状は女面を踏襲したところがあり、見開きの大きい菱形の眼は山姥に似るところもあって、本面も姥を表した仮面とみておきたい。

面裏は経年の手摺れなどで黒変しており、肉眼では銘記は見えないが、赤外線撮影により「永禄十年／正月吉日」の墨書が確認される。定形化や形式化のみられない自由な造形は中世的要素が濃厚であり、この永禄一〇年（一五六七）を制作時期とみなしてよいだろう。

大きく笑う表情の姥面は、中尊寺老女面、東京国立博物館山姥など特殊な表現のものが見られるものの作例は少なく、中世の芸能で用いられる仮面の中に類例を見いだしにくい。その中で本面造形（笑う痩せた老人）に近いものとして、栃



図2 笑う男 輪王寺蔵

木県・輪王寺の特殊な神事に用いられたと考えられる七星面ほかの仮面群のうち、笑う男面（図2）を挙げておきたい。茶人帽のような被り物を着け、落ち窪んだ眼窩に表された眼は強く笑みを浮かべ、頬骨がでて頬は痩せこけながらも大笑して歯を顕わにするもので、表情の印象には似た

ところがある。

輪王寺の神事面の制作時期について、田邊三郎助氏は七星面のうち貪狼星面が寺伝において天文一四年（一五四五）に寄進されたとされることから、仮面群全体も一六世紀半ばより以前の作の可能性があることを、慎重な態度で判断している。⁽⁵⁾ 仮面の制作年代を作風から判断する作業には困難も多いが、永禄一〇年銘の笑う姥面の存在は、こうした中世仮面の制作時期を考える際の、一つの基準点となるものといえよう。なお、乾氏には輪王寺七星面と摩多羅神神事における「仮面劇」、そして中尊寺「老女舞」ほかを読み解く考察があることを付記する。⁽⁶⁾

本面を含む前稿未紹介の一五面については、基本情報（表1）と図版（表・裏）を稿末に一覧として提示する。資料番号は、前稿からの通番（二二四―二三九）とする。

二 神像―姥神坐像の紹介とともに―

乾氏が収集した仮面の半数はアジアやアフリカ、オセアニアなどのものであるが、その興味関心はそれら地域の神像や精霊像などにも及び、多数収集している日本の神像は少なく、宇賀神像が四点と、乾が「姥神像」と呼んだ彫像があるのみであるが、この姥神坐像（図3）については制作時期が中世に遡る可能性がある。あるので紹介しておきたい。

像高三六・七cm、髪際高三三・五cmを計る。⁽⁷⁾ 眼窩が窪み、眼球の膨らみがあらわされ、眼を見開いているようにも、うつむき威迫するような眼差しにも見える。頬骨が出て、頬は痩せてたるみがあり、口腔内を見せるほどに開口する。髪は長く背面に垂らす。衣をまとって背面に帯をあらわし、胸と腹を露出して、左手は立てた膝の上に置いて、右手は掌を上にし持物を執って坐る。持物は現状では赤い板状のものであるが、本来両端に接続する部材があったのかもしれない。足には沓を履いている。

頭体通して、両肩から地付部までを含み檜の一材より木取りし、立て膝する左



图3 姥神坐像



图3 姥神坐像

脚と左手先、袖先部を別材製とする。鼻先、顎先に小材を矧ぎ足し、右手先、右脚および右足先にも別材を矧ぎ寄せ、このうち鼻先・顎先・右手先・右足先は後補部材となる。像表面は胡粉下地を施し、彩色仕上とする。

その姿の特徴は十王に付随する脱衣婆像と概ね共通していて、また立山信仰におけるうば尊信仰の像とも類似し、それらの持物は衣とすることが多い。一方で沓を履くのは珍しく、本像に特有の表現といえる。尊名を特定することは難しいが、姥像の典型的表現といえよう。風貌などがはっきりしないところもあるが、細部の造形に拘泥しないおおらかな表現の中にも、例えば側面観での背筋の伸びた姿勢などには緊張感ある表現を残していて、造像は中世に遡る可能性がある。紀年銘作例との比較が容易でないが、室町時代後期から江戸時代初めごろ、一六〇一七世紀の制作とやや幅をもって考えておきたい。

本像伝来について乾氏は、「この「姥神像」は、もと高見乾司氏の蔵であったが、縁あって私の処にきた。九州求菩提山系の密教寺院に伝わり、「女神」として祀られていたという」と述べている。⁽⁸⁾この点について高見乾司氏（森の空想ミュージアム・九州民俗仮面美術館主宰）に照会したところ、豊前求菩提山の修験系の家から収集されたもので、同じ家からは現在九州国立博物館が所蔵する陵王面（木製彩色、縦三一・五cm、横二四・五cm、厚一三・五cm、江戸時代、収蔵品番号YK83）が収集されているとの情報を得た。さらなる検証が必要であるが、参考に供したい。⁽⁹⁾

本像を含む四八点の神像について、基本情報（表2）と図版（一部資料を除く）を稿末仮面一覧に続けて提示する。

三 歴史資料

1 盆踊図

その他の絵画・工芸品・古文書・刷物・典籍類を、便宜的に歴史資料として括

り紹介する。これらの資料は乾氏が研究テーマとした被差別地域の歴史と民俗、芸能、風俗に関わるものが多く、乾家伝来資料も一部含む。

この中から、乾氏による泉州地域の盆踊り研究に関連して収集されたと思われる盆踊図（図4）を紹介する。卷子装で、紙本着色、本紙の縦二三・四cm、全長三七・四cmを計る。多様な盆踊（風流踊）をやや俯瞰した視点から描き、その内容を示す詞書を周囲に記すもので、採録される踊りは順に①小町踊、②唐子踊、③奴踊、④唐人踊、⑤かけ踊、⑥こきりこ踊、⑦木曾踊、⑧住吉踊、⑨伊勢踊、⑩若衆踊、⑪ほうさい踊、⑫差物踊の一二種である。

本紙に金箔の禾を散らし、輪になって群舞する人物をそれぞれの踊りの内容にあわせて描き分けている。本図と各踊りの構図が細部まで近似する資料として、国立国会図書館所蔵の「おどりの図」、奈良県立美術館「踊尽し図巻」、センチュリー文化財団「踊尽草子」があり、それぞれ掲載する踊りが重なりつつも異なり、国立国会図書館本が六図（住吉踊・伊勢踊・かけ踊・こきりこ踊・小町踊・唐子踊・ほうさい踊・差物踊）、奈良県立美術館本が九図（木曾踊・住吉踊・伊勢踊・唐子踊・小町踊・若衆踊・唐人踊・かけ踊・こきりこ踊）、センチュリー文化財団本が八図（唐子踊・小町踊・住吉踊・こきりこ踊・唐人踊・若衆踊・かけ踊・差物踊）を示し、順序も異なる。先行研究によればそれぞれ概ね元禄年間（一六八八～一七〇四）ごろの制作とみなされ、京都における江戸時代初期の風流踊の流れをくむ盆踊を描いた絵画資料という位置づけがなされている。⁽¹⁰⁾

これまで把握されていた資料からは合わせて一一種の踊りが確認できるが、本資料はそれらに含まれていない奴踊を追加した、類品中最大の一二種を一巻に掲載している点で注目される。各人物の着衣や風体など風俗表現は江戸時代前期に遡るものといえる一方で、着衣の文様など細部まで最も近似する国立国会図書館本と比べると筆致にやや停滞も見られる。各資料間で図様や詞書に僅かながら違いもみられ、また踊りの順序も異なっているように、共通の祖本からそれぞれを写したとはいえないようだが、転写のあり方や享受のあり方などなお不明な点が多い。本資料の制作時期についても、江戸時代前期から中期にかけて、およそ



①



②



③



④

図4 盆踊図



⑤



⑥



(部分)



①小町踊



②唐子踊



③奴踊



④唐人踊



⑦木曾踊



⑧住吉踊



⑨伊勢踊



⑩若衆踊



⑪ほうさい踊



⑫差物踊

一七〇一八世紀の制作と、幅をもって考えておきたい。伝来は不詳である。^⑪新出の盆踊図として詞書とともに各図を示して情報の共有化を図りたい。

①小町踊「小町おとり／題しらす／色みえて／うつは／めて／太子／ともたち／人の／むすめ／の花にそ／ありけり」

②唐子踊「から子おとり／太鼓／かつこ／てん／から子と／うちおさまりし／おほん代の／めくみ／久方の／雲井／□るかに／吹あくる／笛の音／ことに／おもしろくおとりし／すかた見事さよ／心もさこそといさむらん」

③奴踊「やつこおとり／いらぬ／屋つこの／長かたな／さして／見るへき／人もなし／年より／わかきも／うちまし里／ぬり笠／あふきに／かほかくし／うき世／わすれて／をと里けり」

④唐人踊「とう志んおとり／異国人の／ひけ／なか／敷／小歌にハ／ちんふん／かんと／はねつ／おとり／つ、」

⑤かけ踊「かけおとり／君に／扇の／ほね／おりて／ぬめり／坊主の／ひよこ／と／さし／いて／たる／□から／かさ／そらには／ふら／／にほひ／布くろを／かけおとり／たいこてんてつく／／と／ならひたるわかしゆの／立すかたうつて／はやすつ、みのち、／／ちつたん／／と／みまくほし」

⑥こきりこ踊「こきりこおとり／わか衆／つ、み／しんほち／太鼓に／打はや／されて／こきりこの／ふたつの／竹の／よ、ことに／出てなくさむ／折からハなるも／ならぬもささらの／さら／／うき世を／わたる花／／」

⑦木曾踊「きそんおと里／きそん／十七とらや／くしまいる／屋くしも／とらて候と／ふえ太こ／つ、みに／あして／そろへて／ちやせん／や、ころさと／うきにういて／おもしろい／のふ」

⑧住吉踊「すみよしおと里／住吉の／きしの／姫松／めてたさよと／うたひおさまりし／代に／大伴家持／すへらきの／御代／さかへんと／あつまなる／みちのく山に／こ金花さく／此御代より／よすか／よかるへき／これのおうらに／いとほれは水ハ／わかいてかねかはくと／うたひてうちはにて／ほうしとりまふ面白

さ」

⑨伊勢踊「おいせおとり／中ころに／はやし／わたりし／いせ／おとり／そめ／わけし／その／ふりそてを／しなやかに／あしに／こし／あふき／とりそへて／その志な／／を／おとるなりふり」

⑩若衆踊「□□おとり／心も／きえ／／と／雪の／ふり袖／ちら／／かけ／まて／きよき／月の／夜に／ハ／花の／かほ／はせ／おもし／ろし」

⑪ほうさい踊「ほうさいおとり／ねんふつ／おと里ハ／か子の／ほさつの／まねにや／あらん／志ゆしやう／なる／折からに／見物の／中より／口のよき人／出て／此うちに／あほうさい坊の／いられ候やらん／太ことんからねハ／ちゃんから／／と／うちわらいしおかしき」

⑫指物踊「さし物おとり／大男の／あらしゆつ／なやと／かほうち／志かめ／ちからの／有ほと／津くし成／さし物／おとり／思ひ／心ち／なん／し／けり」

2 紀伊続風土記高野山之部総分法・聖方

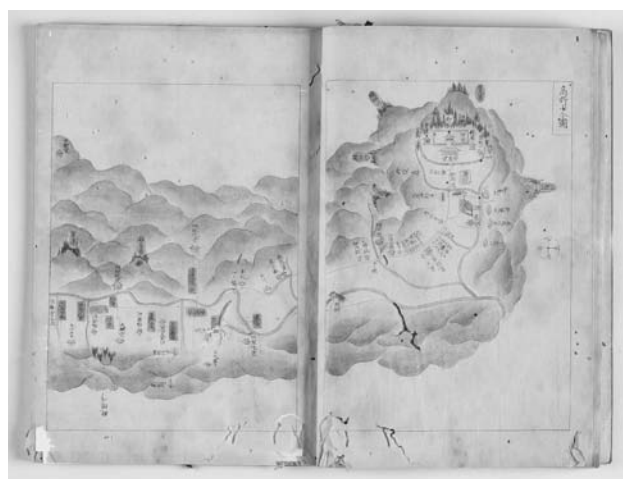
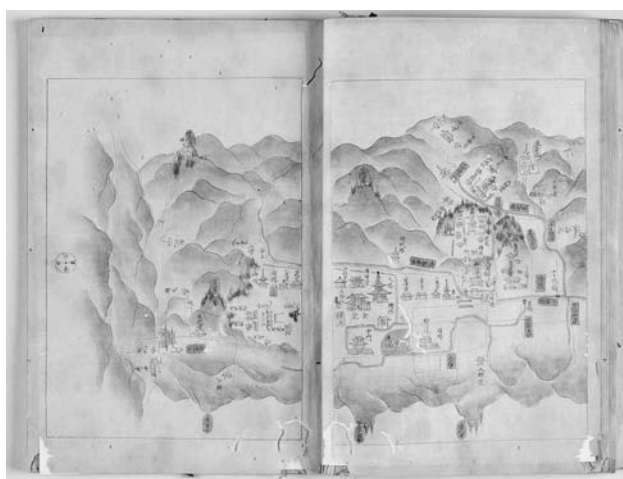
歴史資料のうち、もう一件を紹介する。『紀伊続風土記』高野山之部総分法・聖方の写本一六冊である(図5)。

『紀伊続風土記』は紀伊藩によって文化三年(一八〇六)から編纂が始められ、天保一〇年(一八三九)に完成した地誌で、仁井田好古・本居内遠・加納諸平などの漢学者・国学者が編纂にあたった。本編九八巻(提綱三巻、総論ほか一巻、若山・名草郡・海部郡・那賀郡・伊都郡・在田郡・日高郡・牟婁郡の地誌八九巻、物産五巻)と、附録九四巻(古文書一五巻、神社考定部二巻・高野山七七巻)のあわせて一九二巻からなる。明治四三年(一九一〇)に和歌山県神職取締所から翻刻・公刊され、地域史研究における重要な基礎資料の一つとなっている。

高野山については本編伊都郡のうち巻五二～五六に収載されるが、さらに附録として高野山之部・高野山之部総分法・聖方が編纂されている。大枠としては本編所収部分には学侶方の子院、高野山之部総分法には行人方子院、聖方には聖方



図5 紀伊続風土記高野山之部総分法・聖方



(巻二所収「高野山今図」)



(巻一巻末奥書)

子院が掲載され、その他の情報も重なり合いつつ編纂されている。

本資料は各冊縦二六・七cm、横一八・八cmを計り、表紙・裏表紙は褐色を呈し、表紙には書名を記した題簽を貼り付け、また「和歌山県／二十三年二月十五日改／第 号」と記す朱文方印が全冊に、「明治三十三年 月再調」と記す朱文方印が表紙あるいは本文に捺される。奥書部分には書写者・図画者・校合者などの名が記されている。各冊題簽と奥書に示される人名は次の通り。

- ①題簽「紀伊国統風土記 高野山部 凡例 総分方」
奥書 撰述 本大院普明・龍生員寛洞・成蓮員意皎
訂正 金光院真尊・長福院真応
書写 原卯吉 校合 鹽谷平次郎・神野聡一郎
- ②題簽「紀伊国統風土記 高野山部 総論 総分方 二」
奥書 書写 亀井進 図画 笹川遊原・野際蔡春 校合 鹽谷平次郎・原卯吉
- ③題簽「紀伊国統風土記 高野山部 弘法大師伝 三」
奥書 書写 原卯吉 校合 亀井進・栗本準吉
- ④題簽「紀伊国統風土記 高野山部 奥院 総分方 四」
奥書 書写 鹽谷平次郎 校合 神野聡一郎・亀井進
- ⑤題簽「紀伊国統風土記 高野山部 幸臨 総分方 五」
奥書 書写 栗本準吉 校合 神野聡一郎・原卯吉
- ⑥題簽「紀伊国統風土記 高野山部 巡寺八幡 総分方 六」
奥書 書写 鹽谷平次郎 校合 栗本準吉・原卯吉
- ⑦題簽「紀伊国統風土記 高野山部 本中院谷 総分方 七」
奥書 書写 栗本準吉 校合 亀井進・藤並善助
- ⑧題簽「紀伊国統風土記 高野山部 古文書 総分方 八」
奥書 書写 亀井進 校合 神野聡一郎・藤並善助
- ⑨題簽「紀伊国統風土記 高野山部 蓮花谷 総分方 九」
奥書 書写 鹽谷平次郎 校合 神野聡一郎・亀井進

- ⑩題簽「紀伊国統風土記 高野山部 小田原谷 総分方 十」
奥書 書写 鹽谷平次郎 校合 栗本準吉・藤並善助
- ⑪題簽「紀伊国統風土記 高野山部 千手院谷 総分方 十一」
奥書 書写 原卯吉 校合 鹽谷平次郎・栗本準吉
- ⑫題簽「紀伊国統風土記 高野山部 南谷 総分方 十二」
奥書 書写 栗本準吉 校合 鹽谷平次郎・原卯吉
- ⑬題簽「紀伊国統風土記 高野山部 西院谷 総分方 十三」
奥書 書写 亀井進 校合 栗本準吉・原卯吉
- ⑭題簽「紀伊国統風土記 高野山部 天野神社 総分方 十四」
奥書 書写 栗本準吉 校合 神野聡一郎・亀井進
- ⑮題簽「紀伊国統風土記 高野山部拾遺 座主 総分方 十五」
奥書 書写 神野聡一郎 図画 笹川遊原・野際蔡春 校合 亀井進・栗本準吉
- ⑯題簽「高野山部総文方ノ内トミエ／何レノ卷ニヤ不分」(朱字)「清臣按序同ニ
処考フルニ此卷五十四ノ卷ニテ卷首欠タルニアランカ、然レハ伊都郡第
十三高野山三ノ卷ナリ、スベテ全部一見ノ上ナラテハ定□□シ」
奥書 書写 栗本準吉 校合 神野聡一郎・藤原善助

これにより、①～⑮は『紀伊統風土記』高野山部之部総分法二巻のうち巻一から巻一五までに相当することが分かり、巻一六～巻二一は欠本となる。⑯は題簽では不明としているが、内容を確認すると聖方一巻の全冊に相当する。

本資料と表紙や本文の体裁と書写・校合者が一致する『紀伊統風土記』が和歌山県立図書館に収蔵されている。一九二巻中の一五七巻分にあたり、附録分のうち高野山部之部総分法・聖方分については全て欠本であるので、これらが本来一具であったことは確実といえる。表紙に捺された明治二十三年(一八八九)、同三三年(一九〇〇)調査時の朱印も同様のもので、分かれたのは明治三十三年以降となるが、その事情や詳しい伝来は現時点では定かでない¹²⁾。

なおこの一群については、書写の丁寧さなどから『紀伊統風土記』の藩への献

上本、あるいは副本で、のち和歌山県に引き継がれた資料の可能性があり、また同資料が明治四三年（一九一〇）に公刊される際の底本であったとみられ（明治期の二度の調査はあるいはこの公刊に関わるか）、今後の『紀伊続風土記』研究の上で重要な意義を有するものといえる。

本章で紹介した二件の資料を含む三五件の歴史資料について、基本情報（表3）と一部資料の図版を稿末仮面一覧・神像一覧に続けて提示する。

おわりに

以上、和歌山県立博物館所蔵の乾武俊収集資料について、前稿とあわせ、その全容を報告した。第二次世界大戦の末期に和歌山県で教壇に立って以後、虐げられた側の人々に心を寄り添わせ、独自の詩的な民衆論、芸能論を「かたり」続けた乾武俊の収集資料は、まさしくその思想形成の源となるものであった。⁽¹³⁾ 日本と世界の人々の、信仰と芸能の歴史や記憶の痕跡が、断片となりつつ紡がれた特色ある資料群であり、今後広く活用されることを望みたい。

〔注〕

- (1) 乾武俊の著作・監修・編著書を列記する。詩集『面』（東門書房、一九五二）、詩集『鉄橋』（日本未来派発行所、一九五五）、『詩とドキュメンタリー』（思潮社、一九六二）、『民話教材と同和教育』（明治図書、一九七二）、『伝承文化と同和教育―むこうに見えるは親の家』（明石書店、一九八八）、『泉大津の伝承文化』（泉大津市教育委員会、一九八九）、『お正月の行事と芸能―民衆のこころをさぐる』（大阪府企画調整部同対策室、一九九二）、『泉州地域の盆踊り―民衆のこころをさぐる』（大阪府企画調整部同対策室、一九九二）、『都市の祭り・ムラの祭り―民衆のこころをさぐる』（大阪府企画調整部同対策室、一九九四）、『子守り歌・守り子歌―民衆のこころをさぐる』（大阪府企画調整部同対策室、一九九五）、『民俗文化の深層―被差別部落の伝承を訪ねて』（解放出版社、一九九五）、『被差別部落の民俗伝承「大阪」古老からの聞きとり』（解放出版社、一九九五）、『しごとの歌・愛の歌―民衆のこころをさぐる』（大阪府企画調整部同対策室、一九九六）、『黒い翁―民間仮面のフォークロー』（解放出版社、一九九九）、『達田良善日記』（解放出版社、二〇〇一）、大阪人権博物館『神・鬼・道化―乾武俊がみた仮面世界』（二〇〇二）、『自選 乾武俊著作集第1巻「くどきの系譜」序説』（私家版、二〇〇三）、『自選 乾武俊著作集第2巻 被差別民衆の伝承文化』（私家版、二〇〇四）、『自選 乾武俊著作集第3巻「仮面」と「舞台」』（私家版、二〇〇七）、『自選 乾武俊著作集別冊 被差別部落の民俗伝承』（私家版、二〇〇八）、『能面以前―その基層への往還』（私家版、二〇一二）、『能面以前、補遺 黒い唄』（私家版、二〇一三）。なお、乾の著作を選集した山本ひろ子『宮嶋隆輔編「民俗と仮面の深層へ―乾武俊選集」』（国書刊行会、二〇一五）がある。和歌山県立博物館編『仮面の諸相―乾武俊氏の収集資料から』（和歌山県立博物館友の会、二〇一三）
- (2) 大河内智之「乾武俊氏の収集仮面について―中世在銘資料の紹介とともに―」（『和歌山県立博物館研究紀要』二〇、二〇一四）
- (3) 乾武俊『能面以前―その基層への往還』（注（1）前掲書、一八六頁）。なお、同書（同頁）には「オクシヨンの『図録』には「女面」として紹介されていたが」とあるので、オクシヨンカタログにより入手したとみられる。該当するカタログについて現時点では不明。
- (4) 田邊三郎助「日光輪王寺の仮面」（町田市立博物館編『日光山輪王寺の仮面』町田市立博物館、一九九二、同『論集日本の仮面 上巻』（中央公論美術出版、二〇一九）所収）
- (5) 乾武俊『能面以前―その基層への往還』（注（1）前掲書、二〇九～二三三頁）
- (6) その他の法量は次の通り（単位cm）。頂―顎二・八、面長一〇・一、面幅八・七、耳張一〇・二、面奥二・八、片幅二・四、肘張二七・三、胸厚（右）八・三、胸厚（左）八・五、腹厚一〇・〇、膝張二六・五、坐奥一八・二。
- (7) 乾武俊『能面以前―その基層への往還』（注（1）前掲書、一三二～一三三頁）
- (8) なお求菩提山の中核をなした国玉神社（旧護国寺）やその末寺などの伝来資料中には古代～中世の仏像・神像が多数含まれるが、末寺のうち如法寺（福岡県豊前市）の金剛力士像は平安時代後期の作例で、足首から下は後補材であるものの、両像ともに沓を履くという珍しい姿を見せる（重松敏美『豊州求菩提山修験文化攷』（豊前市教育委員会、一九六九）。沓を履く姥像との関連点として参考にしておきたい。
- (9) 佐々木聖佳「国立国会図書館蔵『おどりの図』―江戸初期盆踊の絵画資料―」（『芸能史研究』

- 一〇六、一九八九、関口静雄「センチュリー文化財団蔵「踊草子」をめぐる」(『水荃』八、一九九〇)、佐々木聖佳「『おどりの図』所載歌謡考―近世初期における風流踊歌―」(『日本歌謡研究』三〇、一九九〇)
- (11) 佐々木聖佳「『おどりの図』所載歌謡考―近世初期における風流踊歌―」(注(10)前掲)の注(5)に「『思文閣墨蹟資料目録』166号に別の一本が掲載されている」と指摘される一本については、図版や付帯情報から、本資料にあたるものと判断される(『思文閣墨蹟資料目録』一六六、思文閣・思文閣美術、一九八六)。なお同目録の解説には「『小町おとり』をはじめ『さし物おとり』まで十三種の盆踊りの様を唄を加えて描出している」とし、本資料箱内に納められる付属便箋にも同じ内容が記されるが、これは本稿で示したとおり一二種の誤りである。
- (12) 本資料の入手について、乾氏からの聞き取りでは(平成二五年五月一九日)、高野山周辺地域の調査に訪れた際、高野町花坂地区の食堂で、書籍等を販売している一角の付近に積み上げられていたのを所望して譲り受けた、とのことであった。参考に提示する。
- (13) 乾武俊の思想と業績への評価としては、友常勉「乾武俊『能面以前 その基層への往還』(私家版、二〇一二年)―仮面・芸能・被差別民の詩学―」(『部落解放研究』一九七、二〇一三)、大河内智之「乾武俊氏の収集仮面について―中世在銘資料の紹介とともに―」(注(3)前掲)、宮嶋隆輔「解説『黒い翁』の向こうへ」(山本・宮嶋『民俗と仮面の深層―乾武俊選集―』(注(1)前掲)がある。

付記 本稿掲載図版のうち、図2は町田市立博物館編『日光山輪王寺の仮面』(町田市立博物館、一九九二)から転載した。

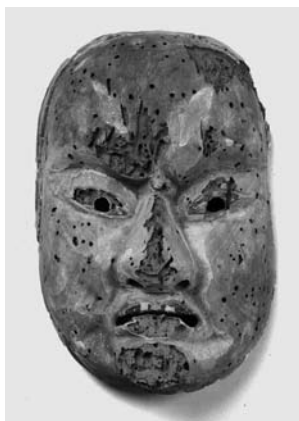
(当館主任学芸員)

表1 仮面一覧

番号	名 称	制 作 地	制作時期	寸法 (面長×面幅×面奥)	面裏情報・特記事項
224	鬼神	日本	近代	25.4 × 17.9 × 11.5	墨書銘「□□□鬼」、焼印「□□□□」
225	皇孫尊	日本	近世	21.9 × 14.5 × 6.8	墨書銘「御勢宮／皇孫尊」
226	伊弉冉尊	日本	近世	20.8 × 14.3 × 6.2	墨書銘「奉納／御勢宮／伊弉冉尊」
227	笑う姥	日本	永禄10年 (1567)	19.1 × 14.1 × 8.7	墨書銘「永禄十年／正月吉日」
228	鬼神	日本	近代	38.8 × 26.7 × 13.4	
229	鬼神	日本	近世～近代	20.5 × 15.5 × 9.4	
230	鬼神	日本	近世～近代	20.2 × 15.7 × 9.7	
231	鬼神	日本	近代	21.6 × 15.8 × 8.5	焼印「沼田」「芦舟」
232	般若	日本	近代	19.3 × 14.2 × 8.8	焼印「沼田」「芦舟」「□」
233	狸	アジアか	不明	19.5 × 14.3 × 9.9	
234	翁	日本	近代	19.6 × 14.7 × 6.3	
235	鬼神	日本	近世	19.7 × 14.0 × 5.7	
236	男	アジアか	不明	17.4 × 14.0 × 4.9	
237	鬼神	日本・佐渡	昭和52年 (1977)	20.5 × 15.2 × 7.3	墨書銘「浜中の豆撒き／佐渡相川／□□ □□作／昭和五十二年」
238	小面	日本	現代	22.3 × 13.2 × 7.1	
239	獅子頭舌部	日本	不明	長 18.2 × 幅 9.5	



(225 面裏)



225 皇孫尊



(224 面裏)



224 鬼神



(227 面裏)



227 笑う姥



(226 面裏)



226 伊弉冉尊



(229 面裏)



229 鬼神



(228 面裏)



228 鬼神



(231 面裏)



231 鬼神



(230 面裏)



230 鬼神



(233 面裏)



233 狸



(232 面裏)



232 般若



(235 面裏)



235 鬼神



(234 面裏)



234 翁



(237 面裏)



237 鬼神



(236 面裏)



236 男



239 獅子頭舌部



(238 面裏)



238 小面

表2 神像一覧

番号	名 称	材料	制作時期	法量 (像高)	制作地・特記事項
1	神像 (その1)	木製	不明	22.0cm	不明
2	宇賀神像 (その1)	木製	江戸時代	28.4cm	日本
3	宇賀神像 (その2)	木製	不明	19.8cm	日本
4	神像 (その2)	木製	不明	19.1cm	インドネシア スマトラ・メンダウイ
5	宇賀神像 (その3)	木製	江戸時代	9.7cm	日本
6	姥神坐像	木製	室町～江戸時代	36.7cm	日本 伝・求菩提山伝来
7	神像 (その3)	石製	不明	20.8cm	インドネシア バタック
8	神像 (その4)	石製	不明	19.5cm	インドネシア バタック
9	石片	石製	—	4.7cm	—
10	宇賀神像 (その4)	木製	近世～近代	4.1cm	日本
11	神像 (その5)	木製	不明	53.5cm	インドネシア カリマンタン・ダヤク族
12	神像 (その6)	木製	不明	64.8cm	不明
13	神像 (その7)	木製	不明	9.4cm	不明
14	神像 (その8)	木製	不明	10.2cm	不明
15	神像 (その9)	木製	不明	28.0cm	パプアニューギニア
16	神像 (その10)	木製	不明	66.5cm	不明
17	神像 (その11)	木製	不明	53.5cm	不明
18	神像 (その12)	木製	不明	22.0cm	インドネシア バタック
19	神像 (その13)	木製	不明	21.0cm	インドネシア バタック
20	神像 (その14)	木製	不明	26.1cm	インドネシア バタック
21	神像 (その15)	木製	不明	25.0cm	インドネシア カリマンタン・ダヤク族
22	神像 (その16)	木製	不明	28.0cm	インドネシア
23	神像 (その17)	木製	不明	23.0cm	インドネシア
24	神像 (その18)	木・鉄	不明	30.2cm	ザイル・コンゴ族
25	神像 (その19)	木製	不明	53.2cm	コートジボワール・バウレ族
26	神像 (その20)	銅製	不明	12.0cm	不明
27	神像 (その21)	木製	不明	33.0cm	インドネシア チモール
28	神像 (その22)	木製	不明	20.7cm	不明
29	神像 (その23)	銅製	不明	14.5cm	スラウェシ・トラジャ族
30	神像 (その24)	木製	不明	40.0cm	アシャンティ
31	神像 (その25)	木製	不明	38.0cm	スラウェシ・トラジャ族
32	神像 (その26)	土製	不明	13.0cm	インドネシア 東ジャワ
33	神像 (その27)	木製	不明	19.0cm	インドネシア カリマンタン・ダヤク族
34	神像 (その28)	木製	不明	10.0cm	インドネシア カリマンタン・ダヤク族
35	神像 (その29)	木製	不明	39.0cm	インドネシア ニアス島・バタック島
36	神像 (その30)	銅製	不明	41.0cm	インドネシア カリマンタン
37	神像 (その31)	銅製	不明	36.0cm	インドネシア カリマンタン
38	神像型容器	木製	不明	24.0cm	インドネシア
39	神像 (その32)	木製	不明	38.0cm	インドネシア カリマンタン・ダヤク族
40	神像 (その33)	銅製	不明	13.0cm	インドネシア
41	神像 (その34)	銅製	不明	13.0cm	インドネシア
42	神像 (その35)	木製	不明	26.0cm	インドネシア バタック島
43	神像 (その36)	木製	不明	51.0cm	インドネシア カリマンタン・ダヤク族?
44	神像 (その37)	木製	不明	46.0cm	インドネシア レンバタ島
45	神像 (その38)	木製	不明	56.0cm	インドネシア ニアス島
46	神像 (その39)	木製	不明	76.3cm	不明
47	神像 (その40)	木製	不明	61.2cm	不明
48	楕形祭具	木製	不明	100.5cm	ニューギニア・マスマット族



3 宇賀神像 (その 2)



2 宇賀神像 (その 1)



1 神像 (その 1)



6 姥神坐像



5 宇賀神像 (その 3)



4 神像 (その 2)



10 宇賀神像 (その 4)



8 神像 (その 4)



7 神像 (その 3)



13 神像 (その 7)



12 神像 (その 6)



11 神像 (その 5)



16 神像 (その 10)



15 神像 (その 9)



14 神像 (その 8)



20 神像 (その 14)



19 神像 (その 13)



17 神像 (その 11)



23 神像 (その 17)



22 神像 (その 16)



21 神像 (その 15)



26 神像 (その 20)



25 神像 (その 19)



24 神像 (その 18)



29 神像 (その 23)



28 神像 (その 22)



27 神像 (その 21)



32 神像 (その 26)



31 神像 (その 25)



30 神像 (その 24)



35 神像 (その 29)



34 神像 (その 28)



33 神像 (その 27)



39 神像 (その 32)



37 神像 (その 31)



36 神像 (その 30)



42 神像 (その 35)



41 神像 (その 34)



40 神像 (その 33)



45 神像 (その 38)



44 神像 (その 37)



43 神像 (その 36)



48 楕形祭具



47 神像 (その 40)



46 神像 (その 39)

表3 歴史資料一覧

番号	名 称	員数	制作時期	寸 法	特記事項
1	恵比須大黒図絵馬	1 幀	江戸時代	47.8cm× 75.2cm	
2	田楽図	1 幀	江戸時代	43.3cm× 31.0cm	
3	盆踊図	1 巻	江戸時代	23.4cm× 371.4cm	
4	住吉踊図	1 紙	江戸時代	30.5cm× 20.4cm	
5	住吉神社御田植神事行列之図	1 紙	近代	25.7cm× 37.2cm	
6	西宮太神宮恵比須大黒図	1 紙	江戸時代	34.8cm× 25.0cm	
7	青岸渡寺牛図	1 紙	江戸時代	16.6cm× 24.3cm	
8	紀州湯峰温泉図	1 紙	江戸時代	24.5cm× 33.2cm	
9	熊野本宮湯峰薬王山	1 紙	江戸時代	24.5cm× 33.0cm	
10	天音山道成寺来由	1 紙	江戸時代	24.8cm× 36.5cm	
11	石造獅子頭部	1 点	不明	高 18.1cm	
12	鬼面瓦	1 点	近世～近代	高 23.3cm	
13	懸仏断片	1 面	中世～近世	径 23.0cm	
14	イカット	1 点	不明	157.0cm× 23.0cm	インドネシア・ティンガナン村
15	刀 銘兼行	1 口	江戸時代	全長 47.6cm	乾家伝来資料
16	懐刀 銘昌房	1 口	江戸時代	全長 36.7cm	乾家伝来資料
17	芭蕉布着物	2 領	近代～現代	丈 121.0cm・118.5cm	沖縄産
18	黒楽茶碗 銘道成寺	1 口	江戸時代	口径 9.8cm 高 9.8cm	
19	沖縄地方陶器	8 口	現代	—	
20	紀伊統風土記高野山之部総分法・聖方	16 冊	江戸時代	26.7cm× 18.8cm	
21	西国巡礼歌要解	1 冊	江戸時代	25.5cm× 18.3cm	
22	泉州信太白狐伝	4 冊	江戸時代	25.9cm× 17.7cm	
23	地藏菩薩靈驗記巻二	1 冊	江戸時代	26.7cm× 18.9cm	
24	越前吉崎西念寺嫁威肉附之面由来	1 冊	江戸時代	24.3cm× 16.1cm	
25	安政二年送手形証文	1 通	江戸時代	29.4cm× 36.8cm	
26	文政五年乳母奉公人請状	1 通	江戸時代	24.7cm× 34.7cm	
27	文化九年遊女奉公差入状	1 通	江戸時代	27.3cm× 55.4cm	
28	嘉永三年宗門往来手形	1 幀	江戸時代	30.4cm× 45.7cm	
29	宗門改関係文書	37 通	江戸時代	—	
30	証文・請状	50 通	江戸時代	—	
31	非人顛狂病死引導法	2 紙	江戸時代	29.0cm× 41.3cm	
32	西国三十三所巡礼来由	1 紙	江戸時代	35.5cm× 47.8cm	
33	龍泉寺牛玉宝印	1 紙	江戸時代	30.3cm× 32.8cm	
34	熊野牛玉宝印	3 紙	江戸時代	20.6cm× 27.1cm他	
35	多賀大社牛玉宝印	4 紙	江戸時代	16.7cm× 12.0cm他	



4 住吉踊図



2 田楽図



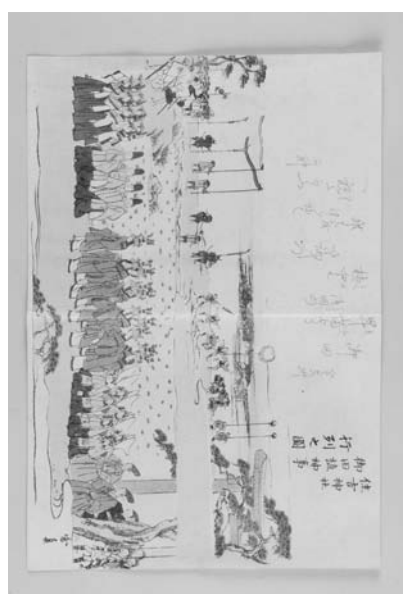
1 恵比須大黒図絵馬



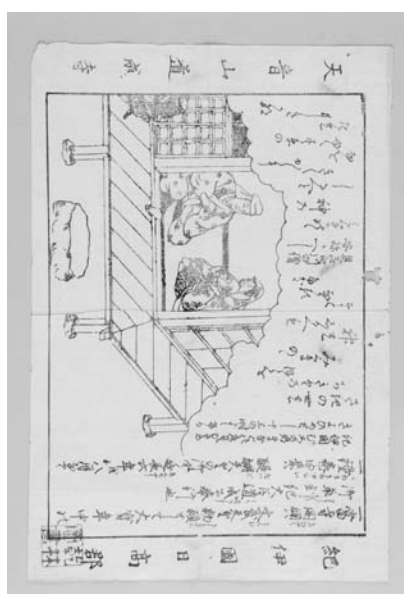
7 青岸渡寺牛図



6 西宮太神宮恵比須大黒図



5 住吉神社御田植神事行列之図



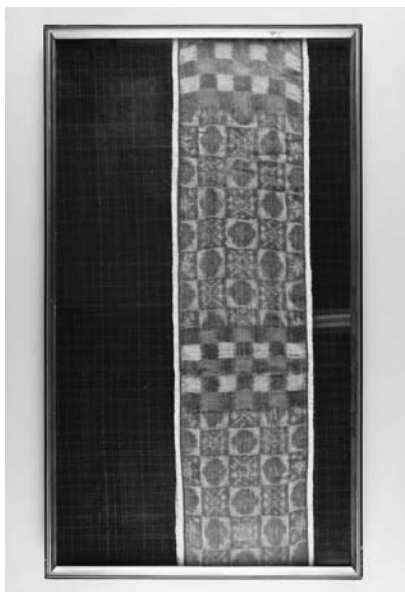
10 天音山道成寺来由



9 熊野本宮湯峰葉王山



8 紀州湯峰温泉図



14 イカット



12 鬼面瓦



11 石造獅子頭部



17 芭蕉布着物



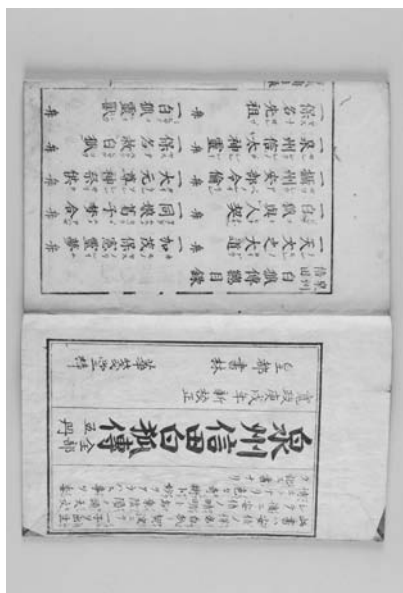
16 懐刀 銘昌房



15 刀 銘兼行



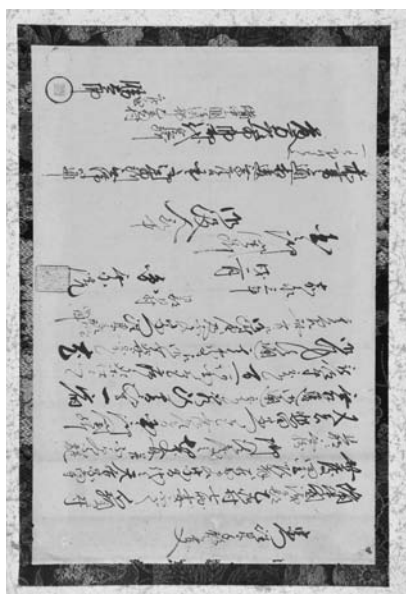
24 越前古崎西念寺嫁威肉附之面由来



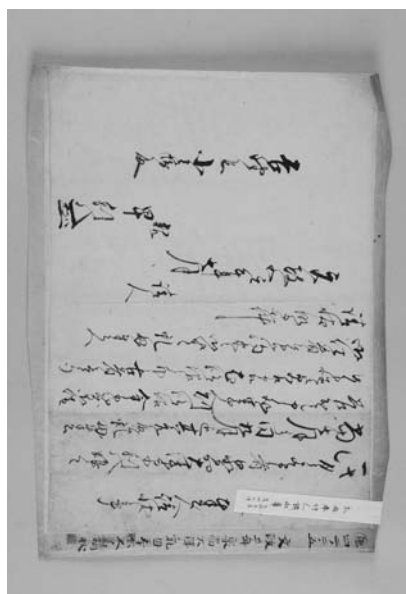
22 泉州信太白狐伝



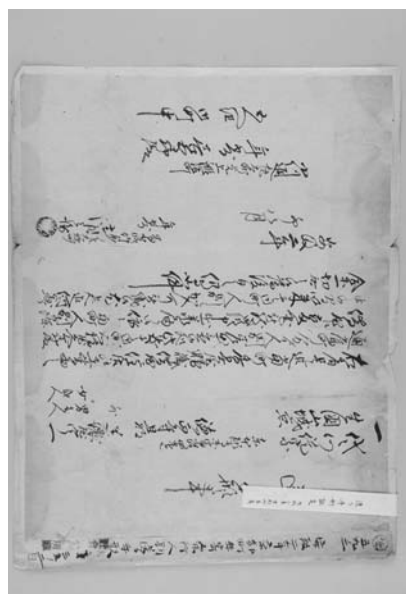
21 西国巡礼歌要解



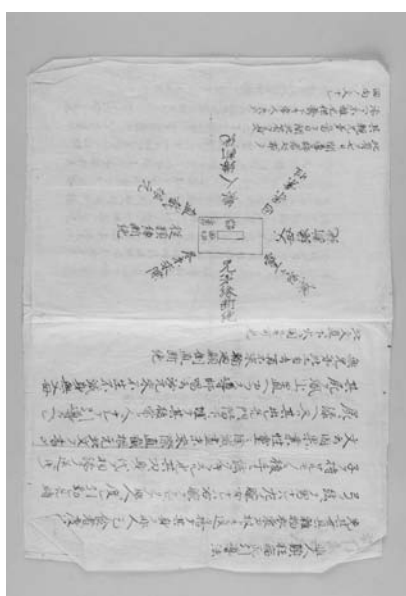
28 嘉永三年宗門往来手形



26 文政五年乳母奉公人請状



25 安政二年送手形証文



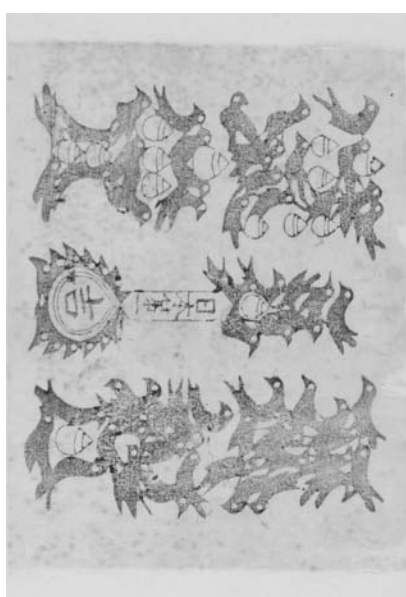
31 非人顛狂病死引導法



30 証文・請状



29 宗門改関係文書



34 熊野牛玉宝印



33 龍泉寺牛玉宝印



32 西国三十三所巡礼来由